サッカーにおける1対2のボール奪いの指導法に関する研究
―ボールを積極的に奪いに行く方法について―

松 本 光 弘

A Study on Gaining the Possession of the Ball in 1 vs. 2 Situation in Soccer
－A Direct Method of Gaining Ball Possession－

MATSUMOTO Mitsuhiro

Purpose of this study is to clarify the points for defenders to challenge and gain the possession of the ball from the attacker in soccer.

Based on game observation and coaching experience of competitive teams, the following 8 points were suggested for future coaching reference.

1. Two defenders should not challenge at the same time.
2. The roles of the 2 defenders should be clarified: either challenger or depriver.
3. The challenging defender should approach when the attacker concentrates on the ball.
4. The depriving defender should direct the challenging defender to restrict the direction for the attacker.
5. The depriving defender and the challenging defender should not face each other when challenging the ball.
6. The challenging defender should approach from one direction not to let the attacker go to that direction.
7. The depriving defender should approach the attacker from behind.
8. The challenging defender should concentrate on preventing the attacker from going to his attacking direction.

Key words: Soccer, 1 vs 2, Gain the ball possession, Challenger, Depriver

I．緒 言

Allen WADE[1]はThe FA Guide to Training and Coachingの中で攻撃側に必要な要素はPenetration(突破)，Depth(厚み)，Width(広がり)，Mobility(活動性)，Improvization(即興性)であり，守備側に必要な要素はDelay(遅延)，Depth(厚み，深さ)，Concentration(集中)，Balance(バランス)，Control/Restraint(自制)であると述べている。近代サッカーを一言で表現するとしたら，コンパクトなサッカーということが言えるであろう。特に，近年では守備ラインのコントロールがサッカーの質の向上に大きく影響し，守備における集中が大きな鍵を握っている。そのような中で特に重要視しなければならないのは，ボール保持者(第一アタッカー)とそれをマークする守備者(第一ディフェンダー)の1対1の局面である。サッカーの発展はこの1対1の相対的力関係によってなされてきたと言っても過言でない。特に守備はこの1対1で劣勢であるということは致命的である。しかし，近年の高いレベルのサッカーでは必ずしも守備側が有利であるとは言えず，むしろ相対的には攻撃側が技能的に優位になってきているとも言える。それに対処するために守備側は組織やコンビネーションによって自分たちの守備力を

強化することを狙いとしてきている。そのような中で相手攻撃チームの突破を食い止め，ボール保持者(第一アタッカー)にプレッシャーをかけ，攻撃方向を向かせないということはボール保持者をマークする守備者(第一ディフェンダー)の主要な役割の一つである。このことは第一ディフェンダーが1人でいたずらにボールを奪いに行くことは相手チームに攻撃突破を容易にする要因になることをも意味する。

松本[5]は相手チームに攻撃されている時にアタッキングラインをさげること(このことはFW，MFが自陣ゴール方向へ戻ることを意味する)を示唆している。その理由のひとつに味方守備者(第一ディフェンダー)が相手の攻撃を食い止め，相手攻撃者(第一アタッカー)がボールをスクリーンした状態になった時，すかさずボールサイドからボールを奪いに行くことの必要性を要求しているからである。この裏には，味方の第一ディフェンダーが相手第一アタッカーの攻撃を食い止めた時，相手の他の攻撃者(第二アタッカー)がいち早く，ボールサイドにサポートすることは攻撃側の大きな有利さを引き出すことになる。この第一ディフェンダーが第一アタッカーの突破を食い止めて，第一アタッカーがスクリーンしている状態で，ボールサイドのスペースを攻撃側が支配するか，守備側が支配するかがその局面のその後の展開に大きく影響する。特に，守備側チームのプレーヤーが集中し，ボールを保持する第一アタッカーへの複数の守備者でのボール奪いを積極的に行うことが近年のゲームの中では多く見られる。

これを他のボールゲームで観察して見ると，バスケットボールに多く見られ，バスケットボールではこの方法でのボール奪取の方法をダブルチーム，あるいはサンドイッチと呼んでいる。ハンドボールでは，特にこのような守備の方法は採用されてない。わずかに，第一アタッカーに複数の守備者が詰め寄り，攻撃側にボールを出させる場所を限定し，守備側チームに有利にすると言う，チーム全体の考え方に留まっている。フィールドホッケーではペアーディフェンスなどと呼ばれ，これに類した守備方法はあるが，攻撃側が相手第一ディフェンダーを押さえる，いわゆるスクリーンプレーがルール上禁止されていることから，この複数の守備者で相手第一アタッカーのボールを奪うプレーはあまり多く出現しない。

この第一アタッカーを複数の守備者でチャレンジし，積極的にボールを奪う，いわゆる1対2でのボール奪いを私たちは相手を挟む守備，あるいはサンドイッチと呼んできた[7]。これに対するサッカーの先行研究を見てみると，ゲロ・ビザンツら[3]は，ディフェンスが数的優位な場面の共通のトレーニング目標として，次のように示している。

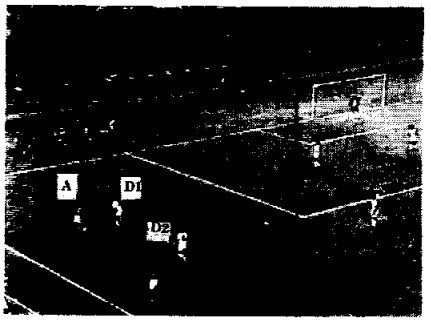
○全てのオフェンスにタイトにつく。「フリー」のディフェンスはボール保持者へ向かう。

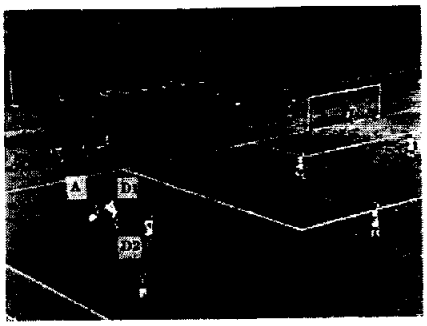
○ボール保持者に2人でアタックし，プレーのスペースを狭くする。それでもパスされたら，次にボールを受けたプレーヤーに再び2人で当たりに行く。

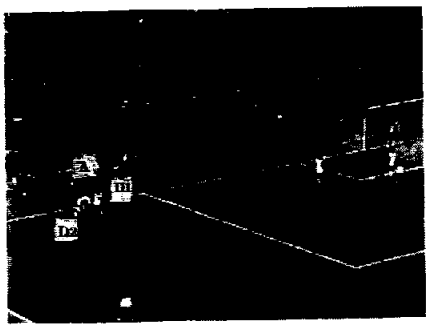
また，トレーニングフォームとしては2対3＋3対2などの局面練習が中心で，ボールを保持する第一アタッカーへの2人の守備者のボールを奪いに行く方法などは具体的に示されていない。

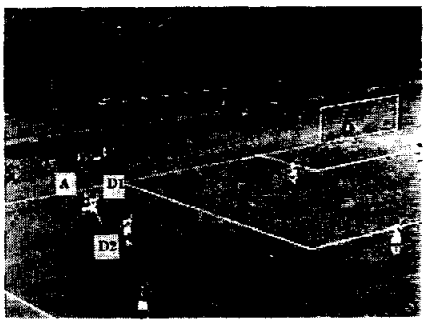
近年Jリーグ発足以来，多くのサッカーの指導書が出版され，戦術についても多く取り上げられているが，ゲーム場面で起きるこの複数の守備者によるボール奪いのグループ戦術の紹介は松本[7]のを除いてほとんど見当たらない。加えて，その指導の方法や要点を取り扱ったものは皆無である。わずかにVTRの教材として松本[6]の「NHKのスポーツ教室」での要点と指導法の紹介と同じVTR教材のアラン・シェアラー[2]のプロトレーニングでの取扱があるくらいである。

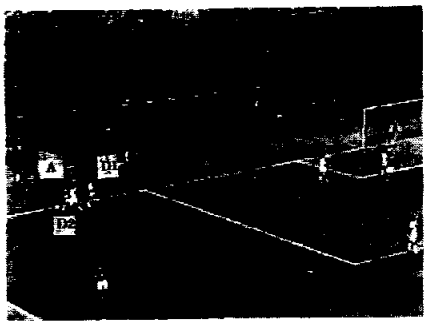
ここで実際の試合場面でのサンドイッチの典型的な例を以下に示す。

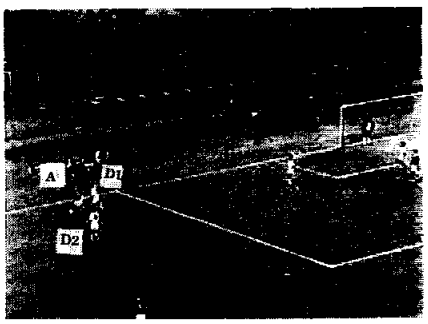


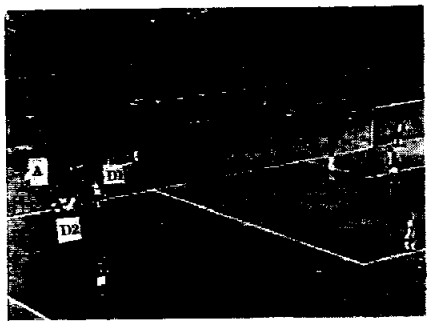

A
D1
D2

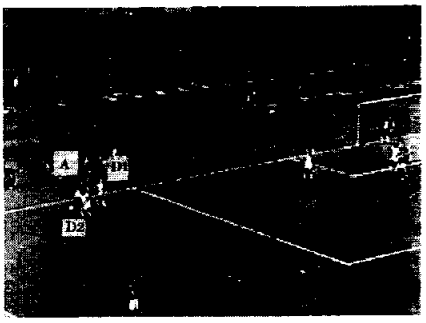

A
D1
D2

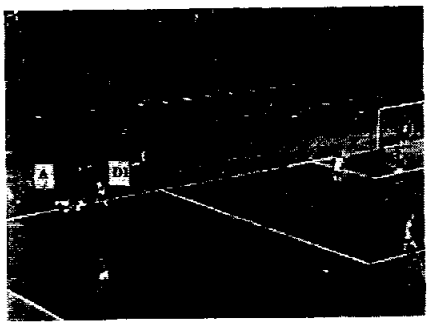

A
D1
D2


A
D1
D2


A
D1
D2


A
D1
D2


A
D1
D2


A
D1

これは平成4年第6回総理大臣杯全日本大学トーナメント決勝戦，筑波大学対福岡大学のTV放映から取り出したものである。前半7分40秒，筑波大学キャプテン三浦文丈(背番号11番)(A)のドリブルに対し福岡大学実好史朗(背番号2番)(D1)が最初にチャレンジし，三浦選手がターンしてボールを保持しようとしたところに福岡大学今岡茂人(背番号4番)(D2)が詰め寄り，サンドイッチの状況を創り出したところである。

このサンドイッチを創り出すための必要条件や指導のポイントはどのようなところにあるのか。これは指導する者としておおいに興味があるところである。これまで多くの試合場面を観察し，実際に指導し，試合で応用してきた中で全てが完璧に網羅されているとは言えないが，原則的な指導のポイントを明らかにしていくことは今後の指導方法の開発におおいに役立つものとの判断からこの指導のポイントと指導段階及び方法を公にするものである。

Ⅱ．方　法

1．指導対象

平成10年度筑波大学体育専門学群サッカー方法論理論・実習受講者3年次生22名

2．日　時

平成10年9月25日　4時限

3．場　所

つくば市高野台　宮本グラウンド(天然芝)

4．撮影器具

カメラ　Sony Digital Handycam
　　DCR-VX 1000　2台
編集　Sony VAIO PCG-XR7

Ⅲ．指導の実際

〈指導のポイント1〉

ディフェンダー2人が同時にボールを奪いに行かない。

図1－1～1－4。ディフェンダー2人(D，Dこの時は後述のD1，D2が決まっていない)が同時にボールを奪いに行くため，アタッカーのドリブル方向を限定できない。チャレンジの仕方によっては反則行為として相手にフリーキックを与えることがしばしば生ずる。

また，このようなディフェンダー側の集中によりアタッカーにドリブルで脱出されたり，ボール

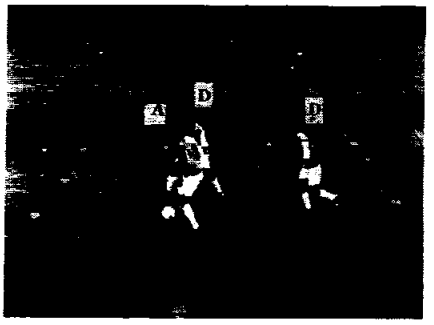


図1－1

図1－2

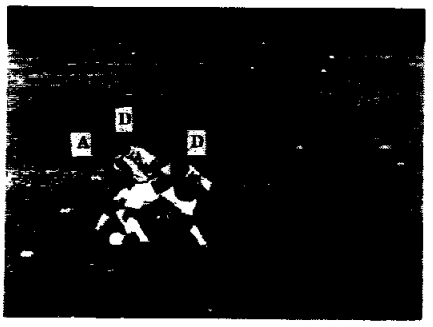


図1－3

図1－4

が他のスペースに展開された時は展開先のスペースではディフェンダー側に数的不利な状態が生起し，非常に危険な状況が起こりかねない。

〈指導のポイント2〉

2人のディフェンダーの役割分担をはっきりさせる。

図2－1～2－9。指導ポイント1の欠点を解消するため，1人はプレッシャーと追い込み(以下D1と記す)，他の1人はボール奪い(以下D2と記す)

D1がアタッカーにプレッシャーをかけ，D1がアタッカーにスクリーンアンドターンさせ，攻撃方向を向かせないという対等な状況，即ち突破を

図2－1

図2－2

図2－3

図2－4

図2－5

図2－6

図2－7

図2－8

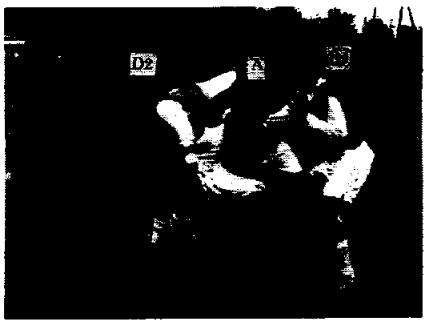


図2－9

阻止し，ディレイさせた1対1の状況になったのを確かめてからD2はボールを奪いに行く。このタイミングが早すぎると指導のポイント1の状態になり易い。

〈指導のポイント3〉

アタッカーがボールウオッチャーになってからD2はボールを奪いに行く。

図3－1～3－7。指導のポイント2の延長とも言えるが，D1が充分プレッシャーをかけたか否かの判断の観点はアタッカーが周囲の状況を把握するためのヘッドアップ(ルックアップ)ができる状態にあるかどうかで判断される。周囲を観察

図3－1

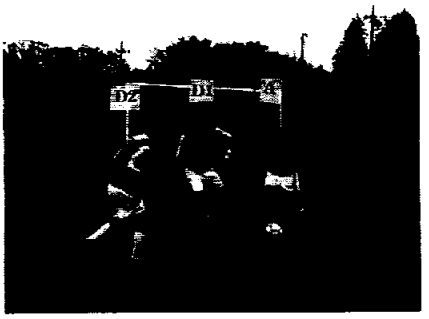


図3－2

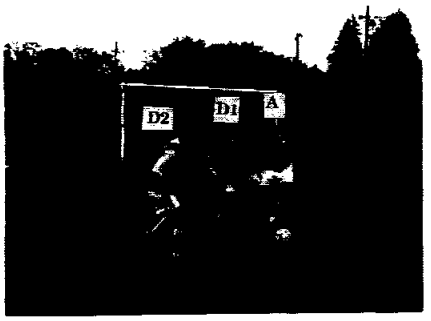


図3－3

図3－4

図3－5

図3－6

図3－7

できる状態ではサンドイッチでの守備はしてはならない。それは，相手味方へのパスによって簡単にその状況を打開されるからである。この相手のパスによる打開は守備側にとってパスを出された地域での数的不利となる場合が多い。D1のプレッシャーによりボールから目を離せない状態(ボールウオッチャー)にすることがこのボール奪いの重要な必要要件である。

〈指導のポイント4〉

ボールを奪うプレーヤー(D2)は追い込むプレーヤー(D1)にコースを指示し，追い込みの方向を限定する。

図4－1～4－7。指導のポイント1の2人で同時にボールを奪いに行かないということと共に，指導のポイント2の役割分担をさらに発展させ，ボールを奪うD2は自分の方向にアタッカーがドリブルで追い込まれてくるようにD1のプレッシャーをかける方向を指示する。ここではアタッカーをD1の右方向から追い込ませ，自分が待ち受ける体制でボールを奪いに行っている。このディフェンダー2人の役割分担と方向の限定の徹底はアタッカーのドリブル方向の変換やフェイント動作に惑わされたりしてなかなか難しい。自

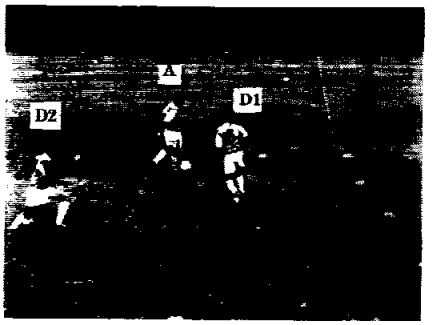


図4－1

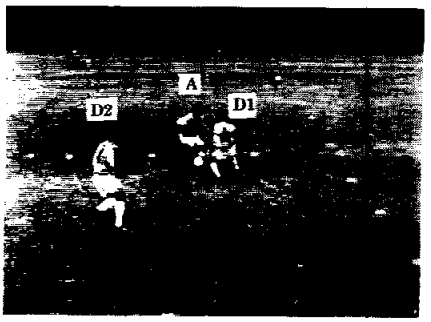


図4－2

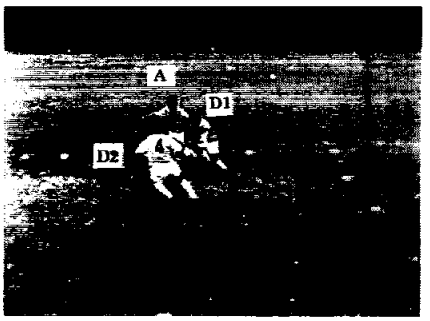


図4－3

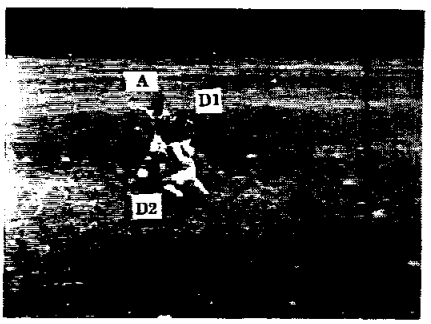


図4－4

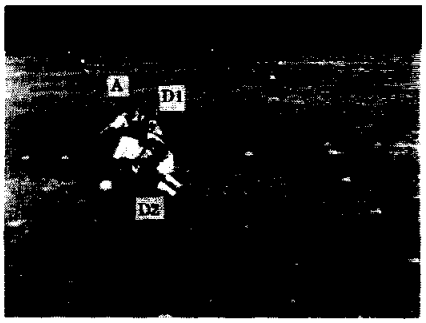


図4－5

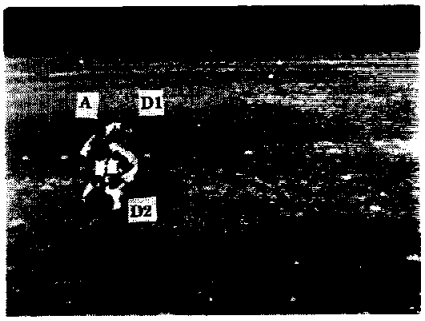


図4－6

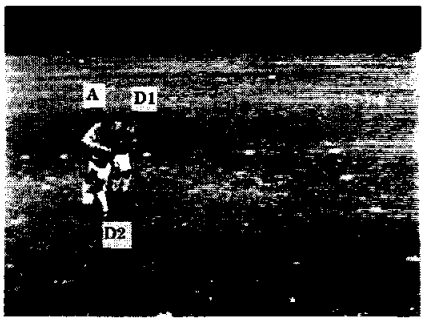


図4－7

分達の意志統一ができたら，それをお互いに徹底してやることが重要な必要要件である。

〈指導のポイント5〉

D1，D2が対面してボールを奪いに行かない。

図5－1～5－4。2人のディフェンダーのボール奪いでは好ましくない方法である。

2人の役割分担がはっきりし，D1の追い込みの方向とD2の待ち受けが上手くできた時，往々に起こりやすいミスがこの2人のディフェンダーがお互い身体の正面を向けた状態でボールを奪いに行くことである。このことによってアタッカー(A)がD1，D2の左右のどちらかの間からすり抜

図5－1

図5－2

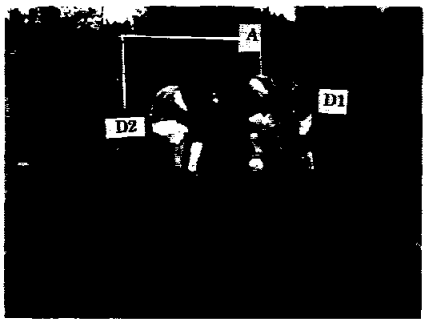


図5－3

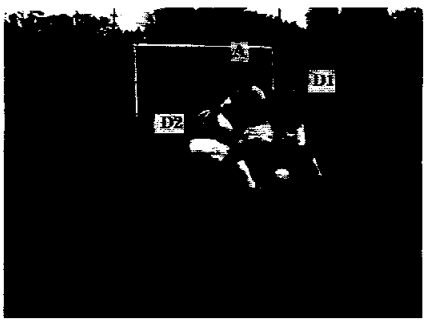


図5－4

けた時，両者が正面衝突することを2人のディフェンダーが想定し，アタッカーに対するプレッシャーをゆるめる結果となり，ドリブルで脱出されることがしばしば起こる。また，2人のディフェンダーの身体が平行なためアタッカーには左右2方向の脱出やパスの可能性が大きくなる。

ただし，Aに意図的にパスを出させ，第三ディフェンダーがそのパスを狙う意図がある時はこの対面した状態でアタッカーに極端なプレッシャーをかける場合もある。

〈指導のポイント6〉

ボールを奪うプレーヤー(D2)は一方向からアプローチし，アタッカーをその方向に脱出させない。

図6－1～6－9。指導のポイント5のディフェンダー同士の衝突の危険を避ける意味も含め，このポイントは重要である。追い込まれてきたアタッカーに対してワンサイドカットをする体制でアプローチし，最終的にはショルダーチャージあるいはボールとアタッカーの間に身体を入れてスクリーンした状態でボールを奪うのが理想的ボール奪いの方法である。この事によってディフェンダー2人とアタッカーがお互いの身体の正

図6－1

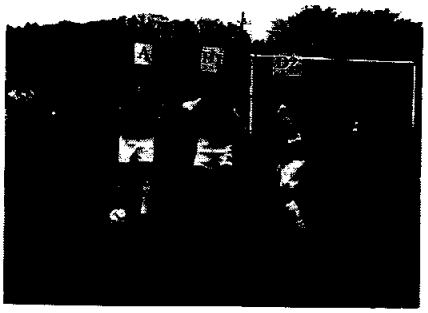


図6－2

図6－3

図6－4

図6－5

図6－6

図6－7

図6－8

図6－9

面から衝突する危険も避けられ，ファールチャージとなることも回避できる。

このD2のボールの奪い方を観察するとサンドイッチという呼称が適当かどうか疑問に思われることもある。指導の際サンドイッチというと指導のポイント5の2人のディフェンダーが対面してボールを奪うというイメージをプレーヤーは持つことが多く，そのような時はD2にはアタッカーが保持しているボールを「横から剥がし取れ」等のアドバイスが有効である。

〈指導のポイント7〉

ボールを奪うプレーヤー(D2)はアタッカー(A)の背後からアプローチする。

図7－1～7－7：実際のゲームでは相手の攻撃時に守備チームのプレーヤーは自陣ゴール方向

図7－1

図7－2

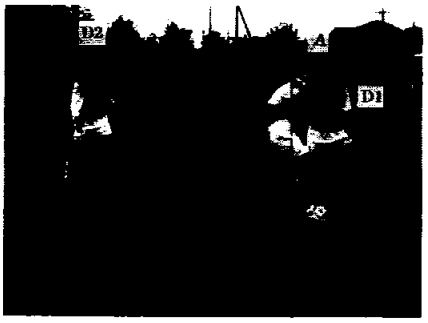


図7－3

図7－4

図7－5

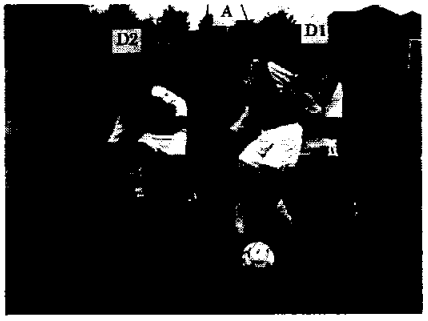


図7－6

図7－7

に戻る事が大切であると前述[5]した。特に相手のドリブル突破などの時，味方第一ディフェンダーは全力で相手の前進を阻止するために行動する。そのような時第一アタッカーは多くの場合スクリーンして，次にターンする。そして，D1を振り切ろうとする。そのような時D2はできる限りアタッカーの視野に入らないようにしながら自陣ゴール側に追いながら戻り，アタッカーの背後からアプローチし，相手がスクリーンアンドターンしたところでボールを奪うように努めるべきである。このプレーができる中盤のプレーヤーを多く持つことはチームに多大な有利さをもたらす。

〈指導のポイント8〉

D1は攻撃方向を完全に塞ぐことに専念する。図8－1～8－9。実際のゲームではアタッ

図8－1

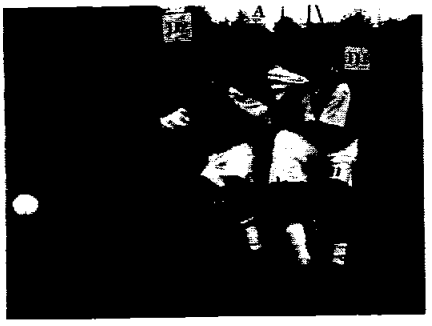


図8－2

図8－3

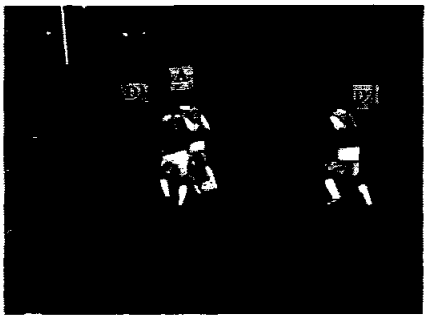


図8－4

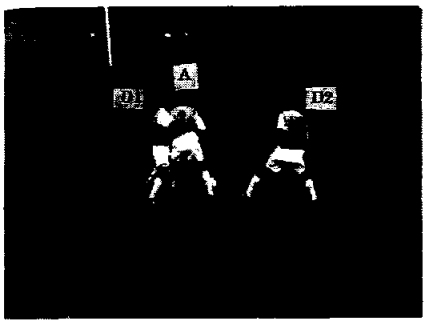


図8－5

図8－6

図8－7

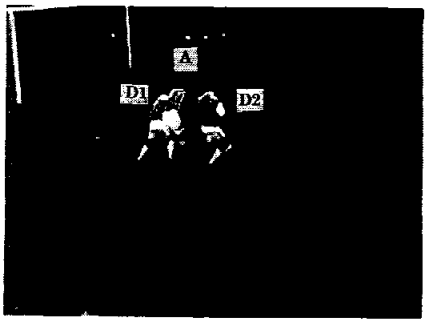


図8－8

図8－9

カー，ディフェンダーともそれぞれ攻撃と守備の方向を考慮に入れなければならない。特に最終ラインでディフェンスするプレーヤーは絶対に自分の背後の自陣のゴール側にアタッカーがボールを持ってプレーさせてはならない。攻撃チームの最重要事項は突破である。そのことを許すことになる。ディフェンダーが数的有利とは言え，いたずらにゴール側に位置するディフェンダーがボールを奪いに行くことは攻撃側の突破の可能性を大にし，危険である。ここで示すように最終ラインのディフェンダー(D1)はアタッカーにプレッシャーをかけ，できる限りアタッカーにスクリーン，そしてターンをさせ，攻撃方向の逆を向かせる。この状態を確認してからD2はボールサイドからボールを奪いに行く。この時いかなる状況になろうともD1はアタッカーに対し，一枚の破れない壁のような体制でプレッシャーをかけつづけ，ゴールサイドに絶対に抜け出されないようにしなければならない。この要点としては相手がプレッシャーから逃れるため自分のゴール側である後方に動いた時，すかさずプレッシャーを掛け続けること以外はあまり動かないことである。

このゴール側の壁のようなディフェンスが複数のディフェンダーによって形成された時，より広いディフェンスの強固なラインとなる。

Ⅳ．まとめ

現在のサッカーは日進月歩している。その中でもディフェンスに関する考え方や方法はサッカーをさらに高度なものとしていく大きな要因となっている。特にコンパクトな，集中したサッカーでは複数のプレーヤーによるボール奪いはどのゲームにおいても観察できる。

しかし，このゲーム状況下で頻繁におこる複数のディフェンダーによるボール奪いの方法の詳細な分析や指導のポイントなどを取上げている文献はほとんどない。このことについてこれまでのゲームの観察と指導の経験と実際に勝敗を競うゲームをコーチした体験と他のボールゲームの指導者との情報交換の中から得た知見を今後の指導の資料提供に資することを目的に8つの指導のポイントにまとめ，ボール保持者に対する守備者の複数のプレーヤーによるボール奪いの「スキル・ファクター」として提示した。

結果は以下のようである。

1．ディフェンダー2人が同時にボールを奪いに行かない。
2．2人のディフェンダーの役割分担をはっきりさせる。
3．アタッカーがボールウオッチャーになってからボールを奪うプレーヤーはボールを奪いに行く。
5．ボールを奪うプレーヤーは追い込むプレーヤーにコースを指示し，追い込みの方向を限定する。
6．ボールを奪うプレーヤーと追い込むプレーヤーは対面してボールを奪いに行かない。
7．ボールを奪うプレーヤーは一方向からアプローチし，アタッカーをその方向に脱出させない。
8．ボールを奪うプレーヤーはアタッカーの背後からアプローチする。
9．プレッシャーをかけるプレーヤーは攻撃方向（ゴールサイド）を完全に塞ぐことに専念する。

引用・参考文献

1．Allen WADE (1967)：The FA Guide to Training and Coaching. pp2-42. William Heinemann Ltd: London.
2．アラン・シェアラー（松本光弘監修）(1997)：VTR「プロ・トレーニング」，丸善：東京
3．ゲロ・ビザンツ，グンナー・ゲーリッシュ（田嶋幸三監訳）1997：指導者のためのサッカー強化書，pp 205-211，ベースボールマガジン社：東京
4．瀧井敏郎 1995)：ワールドサッカーの戦術，ベースボールマガジン社：東京
5．松本光弘，原田精一郎，関　英樹(1998)：サッカーの攻撃と守備の切り換えについてーその1ー．サッカー医・科学研究 Vol. 17. pp 177-180. サッカー医・科学研究会報告書委員会
6．松本光弘：NHK スポーツ教室「サッカー」1991年11月放映
7．松本光弘：SKILL BOOK-SOCCER，学習研究社：東京